

オーロラの下で

戸川幸夫／作 石田武雄／画



戸川幸夫

オーロラの下で

オーロラの下で

創作児童文学13



1973年1月／発行◎

著者／戸川幸夫

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社**金の星社**

東京都台東区小島1丁目4-3
電話／東京03-861-1506(代表)
振替／東京64678

印刷・製本／合資会社光明社

乱丁落丁本はおとりかえ致しますのでお求めの書店または本社へお申出願います。

913 戸川幸夫

オーロラの下で

金の星社 1972

177 P 22cm (創作児童文学13)

基本カード記載例

8393—012131—1406



オーロラの世界をたたえる／著者

めらめらとオーロラが燃える

そのあやしい光の乱舞の下で

オオカミたちの饗宴（さか）がくりひろげられる

はるかな地のはてから

オオカミたちのもの悲しく

だけど、すごい、ほえ声がひびく

わたしは そんな世界をのぞいてみたい

きつと みなさんも同じでしょう

大自然の中にくりひろげられるすばらしい舞台を！

■ もくじ

第一章 ふぶきのほえ声……………6

第二章 白いオオカミのたんじょう……………28

第三章 初めての戦い……………47



第四章	ハイイログマ	59
第五章	新しい力 あたらし	76
第六章	王座 おうざ をめぐって	93
第七章	オオカミから犬へ	110
第八章	わかれ	126
第九章	そり競争 きようそう	136
第十章	かがやく光の中へ	151
あとがき		175



戸川 幸夫 (とがわ ゆきお)

1912年、佐賀県に生まれる。旧制山形高校（現・山形大学）に学ぶ。のち新聞記者を経て、作家生活にはいる。昭和29年、「高安犬物語」で直木賞を受賞。「日本動物志」「動物風土記」など動物を題材とした作品が多い。

現住所一東京都港区南青山 5 - 3 - 24

石田 武雄 (いしだ たけお)

1922年、京都に生まれる。京都市立美術工芸学校を卒業後、小磯良平氏らの指導を受け、上京して出版関係の仕事にたずさわり、「シートン動物記」「子鹿物語」など動物画に新生面を開拓して注目されている。

現住所一東京都練馬区早宮 1 - 25 - 6

創作児童文学13

オーロラの下で

戸川幸夫／作





第一章 ふぶきのほえ声

太陽がもどってきた。

これから夜の無い世界が、始まるのだ。

だがまだ、どこを見ても白で満ちていた。空も白ければ、大地も白い。はるか向こうに見える海も白かった。

雪と氷とで、うめつくされた世界がどこまでも広がっていた。

しかし、すべてのものが白一色であるというのはまちがいであった。なぜならば、その白い雪と氷の大地のはてから、わき出たように、黒い一すじの線がうかび上がってきたからである。

その黒い線は、ムカデのようにごつごつとした氷の山の間をぬいながら、こっちへ向かつてはってくるのだった。

黒い線が、だんだんと近づいてくると、それは黒い点の集まりからできていることがわかった。

いくつかの小さな黒い点々が、長くつらなつて、やや大きな黒いものをひっばって走っているのだった。その大きな黒いものの中には、動く黒いかげがあった。小さな一列の黒い点々の前にも、

同じようなかげがあった。犬ぞりだった。ふたりの人間が九頭こくとうのそり犬に、そりを引っぱらせて、この広々とした雪原せつげんを走ってきたのだ。

犬たちは種々雑多しゅじゅざつたでアラスカンマラムート犬、エスキモー犬、ハスキー犬と、それらの混血こんけつした犬たちだったが、どれもそり犬としてはりっぱな犬で十分な訓練くんれんを受けていた。

そり犬のリーダーはキングとよばれ、犬たちのなかでもいちばんしつかりした犬がその位置いちに置かれて先頭を走るのだが、このそり犬たちのキングは、ハスキー犬のユーコンという三才のめすだった。ユーコンはオオカミそつくりの毛皮けがわをもっており、ぴんと立った竹をそいのような両の耳りょうみみ、つり上がった目、そのひとみの色は青くすんで美しかった。

かのじよは三才であつたが、生まれつきとても頭がよく、主人しゅじんに従順じゆうじゆんだったのでキングの座ざにつけられたのだが、うまく他の犬たちをリードしていた。

「おい、この辺へんで休むとしようか。」

そりの後ろに乗のって、かじを取とっていた年よりの男が、前を走っていたわか者ものに声をかけた。

ふたりはエスキモーの親子だった。部落を代表して八百キロほどはなれた町へ、生活に必要なもの——糸だとか、食物だとか、火薬やなまりなどを、毛皮と交かんしに行つての帰りだった。

もう十日ほど走り続けていた。行きに二週間、そしてたった一晚とまっただけで帰途についたので、犬たちはひどくつかれていた。

ふつうのときなら、二週間もの長い旅行をしたあとだと、犬たちを四、五日は休ませるのだが、今はそんなひまがなかった。弾丸はなくなっていて、部落ではあすの食りようにもこまるようになっていた。ずっと続いたふぶきのために、食りようや弾丸を求めにゆくことができなかったのだ。

一日も早く、これらの品物を部落に持つてゆかなければならない。

そりが止まると、そり犬たちは鉄砲でうちたおされでもしたかのように雪の中にくろがった。

「きようは二十時間ぶつ通しで走つたもんなあ……。」

老人もわか者もくたくただった。太陽は地平線の上を低くはっている。ほんのわずかの間しか顔を見せないといつても、太陽が現われはじめたことはうれしかった。

老人はアザラシのほし肉を小刀で切りとると、わか者にも半分やった。それがふたりのまずしい食事だった。

犬たちも空腹をうったえた。そこで老人は、さらにアザラシの肉を切りとり、犬たちにあたえた。

犬たちはガツガツと味わいもしないで、かんかんにおつた肉をうのみにした。それはオオカミ流の食事の仕方であつた。こんな原始の世界では、ものの味を味わうなんて、ぜいたくなことだった。野生では、ひとより少しでも早く食べて、ひとよりもたくさん胃の中につめこむことを考えねば生きてゆけないのだ。犬たちはそれを知っていたから、自分の分をのみこむとすぐに、ひとの肉をかつばらおうとにらみまわした。だが、もうどの犬も肉をのみこんでいた。肉がないと知ると、次はねむることだ。ねむるのが何よりもつかれを回復してくれる。

犬たちは雪の中にまるまってねむった。人間たちは食事を終えると、アザラシの皮を雪の上にして、そこにねた。厚い毛皮の服を身にまとっているとはいっても、雪原の上をふいてくる風は皮をはぎとるほどに冷たい。だが雪と氷の中で生まれて、育ったふたりには平氣だった。いびきさえ聞こえた。

人間も犬たちも数時間すうじかんをぐっすりとねむった。

さらさら、さらさら……と粉雪こなゆきがふりかかって、人間や犬たちをうめてゆく。やがて死んだようになっていた老人ろうじんが、むっくりと起き上がって空を見た。

「ああ、これはいけんぞっ。おいテンペラ、起きろ、ふぶきがやってくる。」

その声に、テンペラと呼ばれたわかもはね起きて、不安ふあんそうに空を見上げた。

さっきまで、にぶくかがやいていた太陽たいようは消きえて、ねずみ色の雲ちが地平線へいせんを走っている。

犬たちもがばつと立ち上がった。したくなどは何もいらない。すぐに走り出せばよかった。

老人ろうじんはそりの後ろうしろに乗のって、

「ホイッ！」

と、かけ声をかけた。犬たちは足に力を入れて、こおりついたそりをすべらせようとふんばる。テンペラはユーコンの前に立って、引きづなを引いた。

キュッ、キイ、ギイッと雪がきしんで、そりは動きはじめた。一度ひとたびすべり出すと、もう楽らくだった。

「この南にタイガがある。そこへもぐりこんで、ふぶきをさけよう。このふぶきは続きそうだ。」

老人はさけんだ。

タイガとは、寒地性の針葉樹のそ林のことであつた。

白い荒野だけだと思われた平原にも、そういった針葉樹のまばらな林があつた。それは南の暑い地方のジャングルとはちがつて、はえている木は背が低くて、まばらだが、それでもその中にもぐりこめば、いくらかは風をふせぐことができる。

老人はタイガの中にはいつて、雪を積み重ねて、ひなん小屋をつくろうと考えていた。

犬たちも人間の心がわかるのか、けんめいに走つた。走るそりのあとから砂煙のように粉雪が舞い上がる。それほどにスピードを出して走つたのだが、ふぶきのほうがひと足はやかつた。

そりが林にげこまないうちに、ごうごうとものすごいなりをあげて、猛ふぶきがおそつてきた。みるみるうちに人も犬も雪ダルマのように白くふくれていった。それでも雪と氷の中で生きてきた人間と犬は強かつた。かれらはよろめくようにして、

ようやく林にたどりついた。

林のおくにもぐりこむと、なるほど風は弱よわまった。北極ほっきょく地方では風は何よりもおそろしい敵てきだ。風は生きているものの体温たいおんをむしりとして、こおらせてしまうからだ。そりをとめると、ふたりはスコップを出して雪をほりはじめた。雪の中にあなをつくり、そこにもぐって、冬眠とうみんのクマのように、じっとふぶきが過ぎ去るのを待つのが、今の場合、いちばんりこうなことなのだ。

雪はかんかんにおりついて、スコップもはねつけた。だが、ふたりはけんめいになつて雪とたたかつた。

少しづつ雪面せつめんがこわれた。こおりついたかたい雪面せつめんをやぶれば、あとは楽らくだった。

一時間ほどして、やっとふたりの人間にんげんがもぐりこめるあなができた。ふたりはそこへはいり、アザラシの皮かわであなの口をふさいだ。それから、クジラの油あぶらのはいったかんを持ちこんで火をつけた。ストーブの代わりだ。その火力は弱いけれども、火がもえているということは心強こたかった。犬たちはめいめいにあなをほって、雪の中にもぐり、ふさふさした尾おで顔をおおってねむりについた。北極ほっきょくの犬でなければ、まねのできない強さであった。



アーオー、オー、ウオーン……。

とつぜん林のずっとおくから、するどい、ぶきみなほえ声がひびいてきた。

「オオカミだっ。」

と、テンペラが不安そうにつぶやいた。

「やつらあ、はらすかしてるぜ、とうちゃん。」

老人はだまってるなずいた。老人はながい間の経験から、この季節にはオオカミたちは、うえに苦しんでいることや、一度えものを見つけたら、悪鬼のようになっておそってくることを知っていた。

オオカミが、自分らに気づいてくれないことを願うしかなかった。オオカミが風上についてくれればいいが……。

老人はあなから首を出して、風の流れを調べた。

林の中では、風はうずをまいている。犬たちは強敵であるオオカミの声におびえて、ごそごそ動きはじめてい

る。

「テンペラ、鉄砲てつぽうをとり出せや。それから、弾丸だんがんもできるだけたくさん持もってこい。いつでも出発しゅつぱつできるようにしとけや……。」

老人ろうじんは、せっかくのひなん所じよを出なければなるまいと思おもっていた。

ウォーン、アウ、アウ、オ、オ、オ、オ、オ……。

前よりはずっと近いところで、別のオオカミがほえる。

テンペラが二ちようの銃じゆうと弾丸だんがんを持もってきて、

「どうするね？」

老人ろうじんはちよつとだまっていたが、

「どうもこうもねえ。出発しゅつぱつだよ。」

オオカミの風下かざしもに移動いどうして、にげるしかない。それにはオオカミがすがたを見せる前まえに出発しゅつぱつすることだ。

ふたたび、つらい行進こうしんがはじまった。

森を出ると、ふぶきはまたもすさまじいうなりをあげておそいかかってくる。

だが、オオカミの追ついせきはなくなつたようだった。